



## 第42回

# 「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」

The 42nd Annual Memorial Service for All Who Perished in War



■期日：2022（令和4）年9月18日（日）

■会場：国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑

浄土真宗本願寺派（西本願寺）

Jodo Shinshu Hongwanji-ha（Nishi-Hongwanji）

後援：公益財団法人 全日本仏教会

経文をお入れしております。大切にお取り扱いください。

## 念仏者の生き方

仏教は今から約二五〇〇年前、釈尊がさとりを開いて仏陀となられたことに始まります。わが国では、仏教はもともと仏法と呼ばれていました。ここでいう法とは、この世界と私たち人間のありのままの真実ということであり、これは時間と場所を超えた普遍的な真実です。そして、この真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩を超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常」と「縁起」という言葉で表します。「諸行無常」とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまることなく移り変わっているということであり、「縁起」とは、その一瞬ごとにすべての物事は、原因や条件が互いに関わりあって存在しているという真実です。したがって、そのような世界のあり方の中には、固定した変化しない私というものは存在しません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自分というものを固定した実体と考え、欲望の赴くままに自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心の心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りにならないことで悩み苦しんだり、争いを起こしたりして、苦悩の人生から一歩たりとも自由になれないのです。このように真実に背いた自己中心性を仏教



では無明煩惱むみょうぼんのうといい、この煩惱が私たちを迷いの世界に繋ぎ止める原因となるのです。なかでも代表的な煩惱は、むさぼり・いかり・おろかさの三つで、これを三毒さんどくの煩惱といいます。

親鸞聖人しんらんしょうにんも煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山ひえいざんで二十年にわたりご修行に励まれました。しかし、どれほど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の深さを自覚され、ついに比叡山を下り、法然聖人のお導きによって阿弥陀如来あみだにょらいの救いのはたらきに出遇あわれました。

阿弥陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま救い、さとりの世界へ導こうと願われ、その願い通りにはたらき続けてくださっている仏さまです。この願いを、本願ほんがんといいます。我が執しゅう、我欲がよくの世界に迷い込み、そこから抜け出せない私を、そのままの姿で救うとはたらき続けていてくださる阿弥陀如来のご本願ほど、有り難いお慈悲じひはありません。しかし、今ここでの救いの中にありながらも、そのお慈悲ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かさ、煩惱の深さに悲嘆ひたんせざるをえません。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎つつしみ、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足しょうよくちそく」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語わげんあいご」という生き方です。たとえば、それらが仏さまの真似事まねごとといわれようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙で、「あなた方は）今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさ

いう三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるので「す」とお示しになられています。たいへん重いご教示です。

今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲に執とらわれた煩惱具足ぼんのうぐそくの愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはできません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心にかなう生き方を目指し、精一杯努力せいいつぱいぼつさせていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧ちえと慈悲じひを正しく、わかりやすく伝え、そのお心にかなうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう。

二〇一六（平成二十八）年十月一日

浄土真宗本願寺派門主

大谷 光淳

## 「私たちのちかい」についての親教

私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちが、この現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきました。このたび「念仏者の生き方」を皆様により親しみ、理解していただきたいという思いから、その肝要を「私たちのちかい」として次の四カ条にまとめました。

### 私たちのちかい

- |  |  |
|--|--|
| <p>一、自分の殻<small>から</small>に閉じこもることなく<br/>         穏<small>おだ</small>やかな顔と優しい言葉を大切にします<br/>         微笑<small>ほほえ</small>み語りかける仏さまのように</p> | <p>一、自分だけを大事にすることなく<br/>         人と喜びや悲しみを分かち合います<br/>         慈悲<small>じひ</small>に満ちみちた仏さまのように</p>                |
| <p>一、むさぼり、いかり、おろかさ<br/>         に流されず<br/>         しなやかな心と振る舞いを心がけます<br/>         心安らかな仏さまのように</p>                                       | <p>一、生かされていることに気づき<br/>         日々に精<small>せい</small>一杯<small>いっぱい</small>つとめます<br/>         人びとの救いに尽くす仏さまのように</p> |

この「私たちのちかい」は、特に若い人の宗教離れが盛んに言われております今日、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会ですべて唱和していただきたいと思っております。そして、先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

二〇一八（平成三十）年十一月二十三日

浄土真宗本願寺派門主 大谷 光淳



# 浄土真宗のみ教え

南無阿彌陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声  
私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ありがとう といた দিয়ে

この愚身をまかす このままで

救い取られる 自然の浄土

仏恩報謝の お念仏

み教えを依りどころに生きる者 となり

少しずつ 執われの心を 離れます

生かされていることに 感謝して

むさぼり いかりに 流されず

穏やかな顔と 優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々に 精一杯 つとめます

（二〇二二（令和三）年四月十五日、立教開宗記念法要に引き続き専如ご門主が述べられた『浄土真宗のみ教え』についての親教）より

# ご挨拶

浄土真宗本願寺派 総長

石上 智康



本日は、第四十二回「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」によるこそご参拝いただきました。有縁の皆さまとともにご法要をお勤めさせていただきますこと、誠に意義深いことと存じます。

宗門では大戦後、毎年、本願寺において戦没者追悼法要を厳修するとともに、一九八一（昭和五十六）年から、大戦のきっかけとなった柳条湖事件の日（九月十八日）に、当墓苑において「全戦没者追悼法要」をお勤めいたしております。ご法要では、敵味方なくすべてのいのちが尊く等しいという仏教の「怨親平等」の教えのもと、すべての戦没者の方がたに心から追悼の意を表します。また、過去の痛ましい歴史を振り返り、再び戦争への道を歩まないという平和への決意を明らかにするため「平和宣言」を行い、「平和の鐘」を撞いています。

戦後七十七年が経ち、つらく苦しい戦争を経験された世代が少なくなる一方、世界に目を向けると、昨今のロシアによるウクライナへの軍事侵攻など、いのちが傷つき失われている現実があります。このような不安な国際情勢のなかで、一人ひとりがいのちの尊さにめざめ、同じ過ちを二度と繰り返さないよう、非戦平和の決意を未来に伝えていかなければなりません。

宗祖親鸞聖人は「世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ」と願われました。争いが起こる根底には、人間の自己中心的な考え方によって自らの利益を追求し、他のいのちの尊厳を傷つける生き方があるのではないのでしょうか。ご門主様はご親教「念仏者の生き方」で、私たちの悩みや悲しみのみならず、テロや紛争など、これらの原因の根本は「ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります」と述べられ、「それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心にかなう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです」とお示しく下さいました。

私たちは念仏者として、ご親教「念仏者の生き方」「私たちのちかい」「浄土真宗のみ教え」に学び、仏の智慧に導かれる念仏者として、自他共に心豊かに生きる社会の実現をめざしてゆくことが大切です。この法要が改めてその機縁となりますよう念願いたします。

二〇二二（令和四）年九月十八日

合掌

# 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要の願い

私たち浄土真宗本願寺派では、戦後、本願寺ならびに大谷本廟において、「戦没者追悼法要」を修行してまいりました。あわせて一九八一（昭和五十六）年から、毎年九月十八日に、東京都千代田区にある国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、「全戦没者追悼法要」をお勤めしてまいりました。

「全戦没者」という言葉には、人類が繰り返してきた戦争によって、尊いのちを失われた世界中の全ての戦争犠牲者への思いが込められています。

また、毎年お勤めしている九月十八日は、十五年にわたる「アジア・太平洋戦争」につながっていった「満州事変」の発端である「柳条湖事件」が一九三一（昭和六）年に起こったその日でもあります。

国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、一九五九（昭和三十四）年に建てられた国立の墓苑で、主に「アジア・太平洋戦争」で亡くなられた軍人から民間人に至るまでの、ご遺族のもとに帰ることの

できなかつた約三十五万の方々のご遺骨が納められています。

それらの経緯からしても、この墓苑は、国籍・思想・信条などを超えて、全ての戦没者を追悼するに相応しい厳粛にして大切な場所であると言えます。

一九九五（平成七）年四月十五日に本願寺で厳修された「終戦五十周年全戦没者総追悼法要」に際してのご親教でご門主は、「宗祖の教えに背き、仏法の名において戦争に積極的に協力していった過去の事実を、仏祖の御前に慚愧せずにはおれません」と、宗門の戦争にかかる責任を明らかにされ、平和を求める念仏者としての決意を表明されました。

また、二〇〇四（平成十六）年五月二十四日には、総局が、「戦後問題」に関する「宗令」「宗告」を發布し、宗門として改めて「宗門における『戦後問題』への対応に関する総局見解」を示しました。その中で「戦時下における宗門は、政治の全体主義化・軍国主義化とともに

に厳しい法の統制をうけながら、国策としての戦争や国体護持に協力してきました」とし、「このうへは、『世の不安穏なれ』『仏法ひろまれ』との宗祖の遺訓を体し、過去の歴史への反省に立つて、戦争のない平和な世界を築いていくため、世界中の人びととの交流と対話をとおして、非戦・平和への取り組みをさらに進めていく所存であります」との決意を表明しました。

そうした立場から、国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で追悼法要を修行することは、日本の侵略戦争に協力した私たちの宗門の過ちを反省し、慚愧の思いをもって、戦争のない世界を築くという願いのもと、平和への誓いを新たにすることに他なりません。

本法要を機縁として、全ての戦没者の方々を追悼するとともに、今後ともそれぞれの立場で非戦平和への取り組みを進めさせていただきましよう。



## Aspiration for the Memorial Service for All Who Perished in War

---

The Jodo Shinshu Hongwanji-ha Buddhist sect, after the conclusion of World War II, has been conducting annual memorial services at the Hongwanji and Otani Mausoleum in Kyoto for those who perished in war. In addition to these services, we have been observing the Memorial Service for All Who Perished in War at the Chidorigafuchi National Memorial Park, Chiyoda-ward, Tokyo, since 1981.

The phrase “All Who Perished in War” contains our sentiment toward all victims in the world who lost their precious lives due to repeated warfare by human beings.

We conduct the annual service at Chidorigafuchi on September 18, the date of the Lake Liutiao Incident, also known as the Mukden Incident, an early event that led to the Manchurian Incident, which was the preface to the Asia-Pacific War that lasted for 15 years.

The Chidorigafuchi National Memorial Park was established in 1959, and it is where the ashes of approximately three hundred fifty thousand people are interred, mostly from the Asia-Pacific War, including both military and civilian, that could not be returned to their families.

Considering these circumstances, going beyond nationality, principle and policy, this Park with its atmosphere of solemnity and dignity, should be regarded as the appropriate place where we pay our homage to all who perished in war.

On April 15, 1995, the Fiftieth Anniversary of the End of the Second World War and Memorial for All Who Perished in the War was conducted at the Hongwanji, and the Monshu (the head priest and religious leader) of the Jodo Shinshu Hongwanji-ha delivered his official message. In it, the Monshu stated, “...in front of the Buddha and our forebears, we cannot help but feel deep shame and repentance for the fact that we actively cooperated in promoting the war under the name of the Buddha Dharma, disregarding the teaching of our Founder...” which clarified the responsibility of our religious organization concerning the war and expressed our solid resolution to live as Jodo Shinshu Buddhists who pursue world peace.

On May 24, 2004, the Hongwanji Board of Governors issued decrees to express their official view as to how the Hongwanji should address and cope with problems from the war that remain. The decrees reconfirm the Monshu’s message as follows: “During the war, under the tremendously strict legal control that was emphasized in accord with development of the political totalitarianism and militarism, our religious organization cooperated with the military regime and gave our support to the war that was begun as a national policy.” Further, they declare, “Out of regret for our own history, in order to attend to the aspiration of our founder Shinran Shonin who wishes ‘May peace and tranquility prevail throughout the world, and may the Buddhist teaching spread!’, we resolve to further our anti-war and peace movements in order to build a peaceful world without war through interchange and communication with the people of the world.”

This being our position, the significance of our conducting the Memorial for All Those Who Perished in War at the Chidorigafuchi National Memorial Park is none other than our expression of regret for our mistake in supporting Japan’s war of aggression and our renewed resolution for peace in order to build world that is free of war.

It is our hope that this Memorial Service will serve as the opportunity to remember all those who perished due to war, and for everyone in their own way to promote activities for eliminating war and building world peace.

# 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

〈日程・次第〉

一、宗門関係学校生徒作文 表彰式・朗読 十二時五十五分

角谷 美玖（相愛中学校）

水野 真希（崇徳高等学校）

一、平和の鐘

一、平和宣言

一、千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

十三時三十分

三奉請

表白

正信念佛偈

和讃・念佛（音楽依用）

回向文

仏教讃歌斉唱 「曲目」 みほとけにいだかれて

## 「平和宣言」「平和の鐘」

●宗門として恒久平和への願いを新たにするため、「平和宣言」を行い、「平和の鐘」を撞きます。

●「讃佛偈」に「響流十方」とお示しのように、仏の教えが十方に響き渡ることの願いから、寺院において仏法を伝える大切なものとされる鐘の響きと、力強い「平和宣言」によって宗門が一体となり、平和への誓いと願いを新たにします。

●千鳥ヶ淵戦没者墓苑から発信する、この恒久平和への思いが、仏のみ教えとともに国内外に響き渡ることを願い、各寺においても本法要の「平和の鐘」の時刻にあわせて、梵鐘を撞いていた  
だくよう願っています。



# 正信念佛偈 (音楽依用)

歸命无量壽如來同音なもふか 不可思議光  
 法藏菩薩曰位時さいせ 自在王佛所  
 觀見諸佛淨土曰こくと 國土人天之善惡  
 建立无上殊勝願ちやうほつ 超發希有大弘誓  
 五劫思惟之攝受じゆうせい 重誓名聲聞十方  
 普放无量无边光むげむ 无对光炎王  
 清淨歡喜智慧光ふだん 不斷難思无稱光  
 超日月光照塵刹いっさい 一切群生蒙光照

本願名號正定業しん 至心信樂願爲曰  
 成等覺證大涅槃ひつ 必至滅度願成就  
 如來所以興出世ゆい 唯說彌陀本願海  
 五濁惡時群生海おつ 應信如來如實言  
 能發一念喜愛心ふだん 不斷煩惱得涅槃  
 凡聖逆謗齊迴入によ 如衆水入海一味  
 攝取心光常照護い 已能雖破无明闇  
 貪愛瞋憎之雲霧じやうふ 常覆眞實信心天

顯大聖興世正意  
 明如來本誓應機  
 印度西天之論家  
 中夏日域之高僧  
 信樂受持甚以難  
 難中之難無過斯  
 彌陀佛本願念佛  
 邪見憍慢惡衆生  
 佛言廣大勝解者  
 是人名分陀利華  
 一切善惡凡夫人  
 聞信如來弘誓願  
 獲信見敬大慶喜  
 卽橫超截五惡趣  
 譬如日光覆雲霧  
 雲霧之下明无闇

依修多羅顯眞實  
 光闡橫超大誓願  
 天親菩薩造論說  
 歸命无尋光如來  
 唯能常稱如來號  
 應報大悲弘誓恩  
 憶念彌陀佛本願  
 自然卽時入必定  
 顯示難行陸路苦  
 信樂易行水道樂  
 宣說大乘无上法  
 證歡喜地生安樂  
 龍樹大士出於世  
 悉能摧破有无見  
 釋迦如來楞伽山  
 爲衆告命南天竺



往還	天親	三藏	本師	遊煩	得至	歸入	廣由
迴向	菩薩	流支	曇鸞	惱林	蓮華	功德	本願
由他	論註	授淨	梁天	現神	藏世	大寶	力迴
力	解	教	天子	通	界	海	向
正定	報土	焚燒	常向	入生	卽證	必獲	爲度
之	回果	仙經	鸞處	死菌	眞如	入大	群生
回	顯誓	歸樂	菩薩	示應	法性	會衆	彰一
唯信	願	邦	禮	化	身	數	心
心							

光明	善導	一生	三不	萬善	道綽	必至	惑染
名號	獨明	造惡	三信	自力	決聖	无量	凡夫
顯	佛正	值弘	誨慇	貶勤	道難	光明	信心
回緣	意	誓	慇	修	證	土	發
開入	矜哀	至安	像末	圓滿	唯明	諸有	證知
本願	定散	養界	法滅	德號	淨土	衆生	生死
大智	與逆	證妙	同悲	勸專	可通	皆普	卽涅
海	惡	果	引	稱	入	化	槃

- 眞 <small>しん</small> 宗 <small>しゅう</small>	- 本 <small>ほん</small> 師 <small>し</small>	- 煩 <small>ぼん</small> 惱 <small>のう</small>	- 極 <small>ごく</small> 重 <small>じゅう</small>	- 專 <small>せん</small> 雜 <small>ざう</small>	- 源 <small>げん</small> 信 <small>しん</small>	- 與 <small>よ</small> 韋 <small>い</small>	- 行 <small>ぎやう</small> 者 <small>じゃ</small>
- 教 <small>きやう</small> 證 <small>じやう</small>	- 源 <small>げん</small> 空 <small>くう</small>	- 鄣 <small>けしやう</small> 眼 <small>げん</small>	- 惡 <small>あく</small> 人 <small>にん</small>	- 執 <small>しゅう</small> 心 <small>しん</small>	- 廣 <small>こう</small> 開 <small>かい</small>	- 提 <small>だい</small> 等 <small>とう</small>	- 正 <small>じやう</small> 受 <small>じゆ</small>
- 興 <small>こう</small> 片 <small>ぺん</small>	- 明 <small>みやう</small> 佛 <small>ぶつ</small>	- 雖 <small>すい</small> 不 <small>ふ</small>	- 唯 <small>ゆい</small> 稱 <small>しやう</small>	- 判 <small>はん</small> 淺 <small>せん</small>	- 一 <small>いち</small> 代 <small>だい</small>	- 獲 <small>かく</small> 三 <small>さん</small>	- 金 <small>こん</small> 剛 <small>こう</small>
- 州 <small>しゅう</small> 選 <small>せん</small>	- 佛 <small>ぶつ</small> 教 <small>きやう</small>	- 見 <small>けん</small> 大 <small>だい</small>	- 佛 <small>ぶつ</small> 我 <small>が</small>	- 深 <small>じん</small> 報 <small>ほう</small>	- 教 <small>きやう</small> 偏 <small>へん</small>	- 忍 <small>にん</small> 即 <small>そく</small>	- 心 <small>しん</small> 慶 <small>きやう</small>
- 擇 <small>じやく</small> 本 <small>ほん</small>	- 憐 <small>れん</small> 愍 <small>みん</small>	- 悲 <small>ひ</small> 无 <small>む</small>	- 亦 <small>やく</small> 在 <small>ざい</small>	- 化 <small>け</small> 二 <small>に</small>	- 歸 <small>き</small> 安 <small>あん</small>	- 證 <small>じやう</small> 法 <small>ほつ</small>	- 喜 <small>き</small> 一 <small>いち</small>
- 願 <small>がん</small> 弘 <small>くわ</small>	- 善 <small>ぜん</small> 惡 <small>あく</small>	- 倦 <small>けん</small> 常 <small>じやう</small>	- 在 <small>ざい</small> 彼 <small>ひ</small>	- 土 <small>ど</small> 正 <small>じやう</small>	- 養 <small>やう</small> 勸 <small>かん</small>	- 性 <small>しやう</small> 之 <small>し</small>	- 念 <small>ねん</small> 相 <small>さう</small>
- 惡 <small>あく</small> 世 <small>せ</small>	- 凡 <small>ぼん</small> 夫 <small>ふ</small>	- 照 <small>じやう</small> 我 <small>が</small>	- 攝 <small>せつ</small> 取 <small>しゆ</small>	- 辨 <small>べん</small> 立 <small>りつ</small>	- 勸 <small>かん</small> 一 <small>いつ</small>	- 常 <small>じやう</small> 樂 <small>らく</small>	- 應 <small>おう</small> 後 <small>ご</small>

弘くわふふいいししううじじりりんんででんんげげ    けけちちぎぎじじうういいしし  
 そそくにくにののじじやくやくじじううむむ    いいららく    ひひつつちちししんんいいののううににゆゆ  
 ユユルク    ぐぐききううだだいいじじししうう    じじうう    さいさい    むむ    へへんん    ごご    じじくく    ああ  
 どうどう-ぞぞ    じじ    しし    ぐぐ    どど    うう    ししん  
 かいかい    かしかし    しし    —————    ここ    うう    そそ    うう    せせつ

道 <small>どう</small>	弘 <small>くわ</small>	速 <small>そく</small>	還 <small>げん</small>
俗 <small>ぞく</small>	經 <small>きやう</small>	入 <small>に</small>	來 <small>らい</small>
時 <small>じ</small>	大 <small>だい</small>	寂 <small>じやく</small>	生 <small>しやう</small>
衆 <small>しゅう</small>	士 <small>し</small>	靜 <small>じやう</small>	死 <small>じ</small>
共 <small>くわ</small>	宗 <small>しゅう</small>	无 <small>む</small>	輪 <small>りん</small>
同 <small>どう</small>	師 <small>し</small>	為 <small>い</small>	轉 <small>てん</small>
心 <small>しん</small>	等 <small>とう</small>	樂 <small>らく</small>	家 <small>け</small>
唯 <small>ゆい</small>	拯 <small>じゆ</small>	必 <small>ひつ</small>	決 <small>けつ</small>
可 <small>か</small>	濟 <small>さい</small>	以 <small>ち</small>	以 <small>ち</small>
信 <small>しん</small>	无 <small>む</small>	信 <small>しん</small>	疑 <small>ぎ</small>
斯 <small>し</small>	邊 <small>へん</small>	心 <small>しん</small>	情 <small>じやう</small>
高 <small>こう</small>	極 <small>ごく</small>	為 <small>い</small>	為 <small>い</small>
僧 <small>そう</small>	濁 <small>じやく</small>	能 <small>のう</small>	所 <small>しよ</small>
說 <small>せつ</small>	惡 <small>あく</small>	入 <small>に</small>	止 <small>し</small>



和讃・念佛

和讃(二首)

同音  
十方<sup>じつぱう</sup>微<sup>み</sup>塵<sup>じん</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の  
念<sup>ねん</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の衆<sup>しゆ</sup>生<sup>じやう</sup>をみそなはし  
撮<sup>せつ</sup>取<sup>しゆ</sup>してすてざれば  
阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>となづけ  
たてまつる

次第に速く



じつ ぼん(?) みじん せ かいの



ねんぶつ の しゆ(?) を みそなわし



せつ しゆ しーて すてざれば



あみだとなづけ たてまつる



ぼん(?) にまなこ さえられて



せつ しゆのこ(?)みし(?) みざれども



だいひ ものうき ことなくて



つねに わがみを てらすなり

煩<sup>ぼん</sup>悩<sup>のう</sup>にまなこさへられて  
撮<sup>せつ</sup>取<sup>しゆ</sup>の光<sup>こう</sup>明<sup>みやう</sup>みざれども  
大<sup>だい</sup>悲<sup>ひ</sup>ものうきことなくて  
つねにわが身<sup>み</sup>をてらすなり

な もあみだ なもあみだぶつ  
な もあみだ なもあみだぶつ

南<sup>同音</sup>无阿弥陀佛  
南<sup>同音</sup>无阿弥陀佛  
南<sup>同音</sup>无阿弥陀佛  
南<sup>同音</sup>无阿弥陀佛

念佛（四句）

ごじよく あくせの われらこそ  
こんご(?) のしんじん ばかりにて  
ながく しょ(?)じを すてはてて  
じねんのじよ(?)どに いたるなれ

自然<sup>じねん</sup>の浄土<sup>じよとう</sup>にいたるなれ  
ながく生死<sup>しよじ</sup>をすてはて、  
金剛<sup>こんごう</sup>の信心<sup>しんじん</sup>ばかりにて  
五濁<sup>ごじよく</sup>悪世<sup>あくせ</sup>のわれらこそ

和讃（二首）



みだの ほんがん しんずべし  
 ほんがんしんずる ひとつはみな  
 せつ しゅ ふしゃの りやくにて  
 むじょう(7) かくをば きたるなり

弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>の 本<sup>ほん</sup>願<sup>がん</sup>信<sup>しん</sup>ずる ひとつはみな  
 本<sup>ほん</sup>願<sup>がん</sup>信<sup>しん</sup>ずる ひとつはみな  
 撰<sup>せん</sup>取<sup>しゅ</sup>不<sup>ふ</sup>捨<sup>しゃ</sup>の 利<sup>り</sup>益<sup>やく</sup>にて  
 無<sup>む</sup>上<sup>じょう</sup>覚<sup>かく</sup>をば きたるなり

な もあみ だ なもあみ だぶつ  
 な もあみ だ なもあみ だぶつ

南<sup>な</sup>无<sup>も</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>  
 南<sup>な</sup>无<sup>も</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>  
 南<sup>な</sup>无<sup>も</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>  
 南<sup>な</sup>无<sup>も</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>

念佛(四句)

和讃（二首）

同音  
弥陀だだの回向えこう成就じゆうじゆして

往相還相おうそうげんそうふたつなり

これらの回向えこうによりてこそ

心行しんぎやうともにえしむなれ

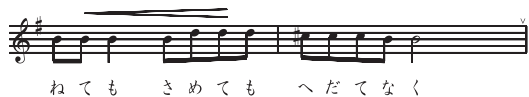


弥陀だだ大悲だいひの誓願せいがんを

ふかく信しんぜんひと はみな

ねてもさめてもへだてなく

南无阿弥陀佛なむあみだぶつをと なふ(り)べし



なもあみだ なもあみだぶつ  
 なもあみだ なもあみだぶつ  
 なもあみだ なもあみだぶつ  
 なもあみだ なもあみだぶつ  
 なもあみだ なもあみだぶつ  
 なもあみだ なもあみだぶつ

同音

南<sup>な</sup> 南<sup>な</sup> 南<sup>な</sup> 南<sup>な</sup> 南<sup>な</sup> 南<sup>な</sup>  
 无<sup>も</sup> 无<sup>も</sup> 无<sup>も</sup> 无<sup>も</sup> 无<sup>も</sup> 无<sup>も</sup>  
 阿<sup>あ</sup> 阿<sup>あ</sup> 阿<sup>あ</sup> 阿<sup>あ</sup> 阿<sup>あ</sup> 阿<sup>あ</sup>  
 弥<sup>み</sup> 弥<sup>み</sup> 弥<sup>み</sup> 弥<sup>み</sup> 弥<sup>み</sup> 弥<sup>み</sup>  
 陀<sup>だ</sup> 陀<sup>だ</sup> 陀<sup>だ</sup> 陀<sup>だ</sup> 陀<sup>だ</sup> 陀<sup>だ</sup>  
 佛<sup>ぶつ</sup> 佛<sup>ぶつ</sup> 佛<sup>ぶつ</sup> 佛<sup>ぶつ</sup> 佛<sup>ぶつ</sup> 佛<sup>ぶつ</sup>

念佛(十二句)

によらい だいひのおんどくは  
 みをこにし てもほ(り)ずべし  
 ししゅ ちしきの おんどくも  
 ほねを くだきても しゅすべし

同音

師<sup>し</sup> 主<sup>しゅ</sup> 知<sup>ち</sup> 識<sup>しき</sup> の 恩<sup>おん</sup> 徳<sup>とく</sup> も  
 身<sup>み</sup> を 粉<sup>こな</sup> に して も 報<sup>ほう</sup> ず べ し  
 如<sup>にょ</sup> 来<sup>らい</sup> 大<sup>だい</sup> 悲<sup>ひ</sup> の 恩<sup>おん</sup> 徳<sup>とく</sup> は

回向文



# 宗門関係学校生徒作文について

次世代を担う青少年に、本法要の趣旨である平和について考えてもらうため、宗門関係学校から「いのちの尊さ」「非戦・平和の大切さ」をテーマとした作文を募集しています。本年も各校から多数の作品が寄せられ、全五十一作品（中学生の部十二校二十一作品、高校生の部十六校三十作品）のなかから最優秀作文、優秀作文が選ばれました。最優秀作文については、法要に先立ち表彰式を行い、朗読をいただきます。

## ○最優秀作文

中学生の部 相愛中学校 角谷 美玖 「平和への願い」  
 高校生の部 崇徳高等学校 水野 真希 「明日」

## ○優秀作文

中学生の部 武蔵野大学中学校 武藤 花音 「戦争を知らない私達」  
 龍谷大学付属平安中学校 鈴木 智尋 「『利他』の心を持って」  
 相愛中学校 天田 未菜 「戦争のない世の中にする為に」  
 高校生の部 京都女子高等学校 小山 陽香 「分かち合って、生きる」  
 兵庫大学附属須磨ノ浦高等学校 市成亜由美 「人が生きる意味」  
 東九州龍谷高等学校 矢津田真衣 「平和の原点」

## 平和への願い

相愛中学校二年 角谷 美玖

「ドン」という戦争映画のような音がテレビから聞こえた。映像には、ウクライナの人々を攻撃しているロシア兵の姿が映っていた。もう戦争は起こしてはならないと、学校の授業で教わっていた私は、その映像を見て、戦争は二度と起こらないものだと思解していたのかもしれないと思った。

このロシアとウクライナの争いをきっかけに、私は母から戦争に行っていた曾祖父とその時代を生き抜いた曾祖母の話聞いた。曾祖父は、戦争の話をしたがらない人だったそうだ。だから母は、家族に家では戦争の話をしていないように言われていたそうだ。何十年たってもその頃の記憶にふたをしなければならぬ曾祖父が、どんな辛い思いをしたのか、私には想像もつかなかった。また、曾祖母は、戦中戦後と戦死した兄に代わり、姪を三人育てたそうだ。毎日が生きていることに精一杯だった曾祖母は、母に、「おばあ

ちゃんには、娘時代がなかったんよ。だから、あなたは娘時代を楽しんでね。」と言ったそうだ。この話を聞いて、戦時中の人々が、自分の人生なのに自分で選べなかったのだということを知り、今の私の生活のありがたさや、悩みの小ささを思い知らされた。

戦争は失うものの方が多いと思う。人間以外の生き物は戦争をしない。なぜ人間だけが、人間の大人だけが争うことを止められないのか。大人なんだから、なぜ話し合いで解決できないのか。私にはわからないことばかりだ。そして、戦争を止める方法も私にはわからない。でも、自分のことだけを考えるのをやめ、お互いがお互いを尊重しあえた時、みんなが幸せになれるはずだと思うのだ。そのことに気づき、当たり前前の日常が早く戻りますように。そう願っている。

(宗門関係学校生徒作文「中学生の部」最優秀作品)

## 明日

崇徳高等学校二年 水野 真希

「明日なにして遊ぶ?」

この言葉に違和感をいだく人はいないと思う。私たちは、いつも「明日」や「来週」など、未来の話をする。今では当たり前のことであるが、七十七年前は当たり前ではなかった。

私の曾祖母は被爆者だった。十歳の夏休みに学校で配布された休み中の予定表にたくさんの予定を書いて、それを曾祖母に見せて言った。

「明日は家族でプールに行くし、来週は友達と水鉄砲して遊ぶよ。」

すると、曾祖母は微笑んでこう言った。  
「いっぱい楽しそうな予定があるんじゃないわ。いい時代になったもんじゃないわ。」

当時の私にはわからなかったが、今の私ならこの言葉に込められた曾祖母の思いが少しはわかる気がする。

戦時中の日本では、毎日が命の危機と隣り合わせだったと聞く。今はみんなが当たり前のように手に入れられる安全や安心、そして未来が、当たり前のもではなかったのである。そんな生活の中、家族や自分を勇気づける時に使用されるのが「明日」という言葉だったそうだ。曾祖母は、あまり戦争や原爆被害のことを話さなかった。しかし、当時のことを思い返すと、「明日」という言葉を使用し、未来の話をする私を見て平和を感じると同時に、曾祖母なりに、日々の会話から安全や安心、未来が当たり前ではないということとを伝えたかったのだろう。

「明日なにして遊ぶ?」という言葉に違和感をいだくことなく生活できていること、安全安心な生活や未来が当たり前になり手に入ることは平和である。しかし、私たちはその平和が尊く貴重なものであるとは気づかない。戦争を経験していない私たちが平和のためにできることは、被爆者の方のお話を伝えることはもちろん、今過ごしている日常や、これから過ごす未来が尊く貴重なものであることに目覚めることだと思う。

(宗門関係学校生徒作文「高校生の部」最優秀作品)



みほとけにいだかれて

一、みほとけに いだかれて

きみゆきぬ 西の岸

なつかしき おもかげも

きえはてし 悲しさよ

三、みほとけに いだかれて

きみゆきぬ 花の里

つきせざる たのしみに

笑<sup>え</sup>みたもう うれしさよ

二、みほとけに いだかれて

きみゆきぬ 慈悲<sup>じひ</sup>の国

みすくいを 身にかけて

しめします かしこさよ

四、みほとけに いだかれて

きみゆきぬ 宝楼閣<sup>たまのいえ</sup>

うつくしき みほとけと

なりましし とうとさよ

親鸞聖人御誕生850年  
立教開宗800年 慶讃法要

2023(令和5)年

- 第1期 3月29日(水)～4月3日(月)
- 第2期 4月10日(月)～4月15日(土)
- 第3期 4月24日(月)～4月29日(土)
- 第4期 5月6日(土)～5月11日(木)
- 第5期 5月16日(火)～5月21日(日)



## 浄土真宗本願寺派(西本願寺)

〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル  
TEL 075(371)5181 FAX 075(351)1372  
本願寺派ホームページ <https://www.hongwanji.or.jp>

## 築地本願寺

〒104-8405 東京都中央区築地3丁目15番1号  
TEL 03(3541)1131 FAX 03(3541)7071  
築地本願寺ホームページ <https://tsukijihongwanji.jp>